Rosario Quarterly Information

広報 ロザリオ

社会福祉法人
ロザリオの聖母会
千葉県旭市野中4017
Tel（0479）60-0600
ホームページアドレス
http://www.rosario.jp
Eメールアドレス
honbu@rosario.jp

第23回（平成26年度）ロザリオ作文コンクール

第22回福祉作文コンクール入賞者のみなさん（平成25年12月６日撮影）

福祉作文全体評

ロザリオ福祉作文コンクールに御協力いただきました教育委員会、小中学校、そして御家庭の皆様に御礼申し上げます。

福祉法人ロザリオの聖母会では未来を担う児童生徒の皆さんに福祉に関心を持っていただこうと毎年福祉作文コンクールを実施して参りましたが、今回も旭、銚子、匝瑳、香取地区の小学校十七校、中学校九校、合わせて二十六校より応募いただきました。

一見豊かそうな社会の陰で障害を持つ人たち、介護の手を待つ人たちがたくさんおります。

人間が人間として大事にされる社会であるようにと願ってロザリオでは事業を進めておりますが、それには市民社会の皆様の御協力をいただかなくてはなりません。

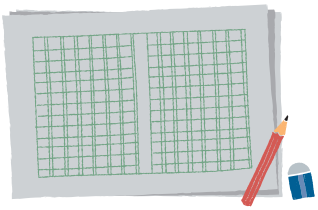
さらには未来の担い手である児童生徒の皆さんにも関心を持っていただかなくてはなりません。

作文を読ませていただきしたがいずれもしっかりした人間尊重の気持ちに溢れた作品で敬服しました。

「自分は健康だが、かわいそうだからお世話してあげよう」とか、「障害者はなにか悪いことをしたのではないのか」「年寄りの世話は面倒だけれど」といったあわれみや、差別意識を持った内容はほとんど無く、たいへん立派でした。

これも日頃の学校の御指導、また御家庭のやさしさ、あたたかさの反映と感謝しております。

最近、スマホ、パソコン等の普及で、文章が書けないという現実がでてきました。しかし、文章を書くということは思考力の錬磨につながり、たいへん重要なことであります。この機会に作文力を育てることも大事かと思います。



ロザリオの聖母会は「重症心身障害児施設」「身体障害者施設」「精神科・内科の療養施設」さらに「知的障害者更生施設」ほかに、食堂、図書室、会議室、保育園、そして、香取市にもロザリオ、旧栗源町高萩にも付属施設を持つ千葉県有数の福祉施設で約六百名の職員が日夜活動しております。

また、たくさんのボランテイアの方々も御協力してくださっております。

児童生徒のみなさん、東総地域にはロザリオ以外にもさまざまな福祉施設があります。先生方にお願いして福祉の仕事の実際にふれていただくこともあるかと思いますし、また家庭やご近所に障害を持った方があるかと思います。どうぞ誰もが明るい毎日を送れるようにお手伝いしてください。

応募に御指導いただいた先生方ありがとうございました。これからの社会では福祉の問題は避けて通れない課題です。成長期に福祉に関心を持つことは人間形成に大事と考えます。

どうぞ、人間尊重、助け合いの御指導をさらに深めていただきますように御期待、お願い申し上げます。

今後共、ロザリオの聖母会への御支援をお願い申し上げ、御礼を申し上げます。

平成二十六年十二月

【審査委員】

鏑木　正（元中学校長・指導室長）

真久孝昭（元中学校長・指導主事）

松井安俊（元中学校長・指導主事）

（ロザリオの聖母会理事）

4年生選評

○2席　旭市立中央小学校　横谷　美佑　さん

【私のおばあちゃん】

おばあちゃんを心配して、そのようすやなおることを願っていたことが、よく書けています。

○2席　旭市立鶴巻小学校　石毛　晴喜　さん

【ぼくの仕事】

くすりをまちがえるとたいへんです。お手伝いをしているのはえらいですね。ひいおばあちゃんが、いつまでも元気でいるようにおうえんしてください。

5年生選評

○1席　銚子市立双葉小学校　宮内　詩乃　さん

【わたしのおじいちゃん】

おじいちゃんの病気の介護をして、いろいろなことがわかりましたね。これからもあたたかくお世話してください。

○2席　旭市立中央小学校　秋元　絵美理　さん

【できる人ができる事をできる時に】

乙武さんを知り、自分も車椅子生活をしてみて、障害のある人をあたたかくお手伝いをしてあげることを知ったのはえらいです。

○2席　旭市立三川小学校
渡辺　大介 さん
【ぼくのじいちゃん】
じいちゃんの車椅子から福祉のことをいろいろ考えたのはえらかったですね。

○3席　旭市立共和小学校
本多　裕希 さん
【そ母の姉の教え】
リューマチの病気の祖母のお姉さんが、病気にも負けず明るく生きていることと、みなさんに親切にしてもらっていることを知ってよかったですね。

○3席　旭市立富浦小学校
加瀬　瑞姫 さん
【ある一つのことわざで】
おばさんの体験を聞いたり、お母さんのことわざを聞いたりして、福祉に関心を持ったのはえらかったですね。

○3席　旭市立干潟小学校
上間　康生 さん
【デイサービスに行って学んだこと】
デイサービスで学んだことが多く、これからも障害のある人をあたたかくお世話してください。

○3席　旭市立矢指小学校
成井　希帆 さん
【ボランティアの仕事】
施設を見学していろいろ知ったのはえらかったですね。

○3席　旭市立萬歳小学校
野口　真由子 さん
【社会を明るくするには】
明るい社会をつくるためには、地域の人々とのふれあいが大事ですね。それを考えたのはえらかったです。

6年生選評

○1席　旭市立琴田小学校
江ヶ崎　友里 さん
【ありがとう高尾さん】
車いす生活になったおばあちゃんの介護を通して、ケアマネージャーさんの苦労や大変さ、大切さに気づかされ、理解が深まりました。
福祉に対する意識も高まり、積極性も出てきたのが、よく表現されています。

○2席　旭市立豊畑小学校
小林　悠 さん
【おじさんがたおれた】
心臓の病気で倒れて入院したおじさんを、家族中でお世話している様子が、目に浮かぶようです。
回復の経過やぼくの思いがしっかり描けていて、家族の温かさが伝わってきます。

○2席　旭市立鶴巻小学校
加瀬　みのり さん
【行って良かった「みんなの家」】
施設「みんなの家」を見学して、最初のイメージと違って、働いている皆さんの身だしなみや働きぶりがしっかりしており、生き生きと協力し合っていることに驚きました。
障害をもっている人に対する偏見を反省し、決めつけはいけないと考えるようになったのは立派です。

○3席　旭市立中央小学校
石毛　優愛 さん
【私の家族】
障害をもつ祖父とおばの様子が詳しく描かれています。一緒にふれ合う中で理解が深められるとともに、温かな、やさしい心情がつづられています。

○3席　旭市立共和小学校
伊藤　実咲 さん
【お年寄りのためにできること】
祖父母の今後を考え、身の回りの設備や施設、介護する人のことなどを、具体的に思いめぐらしています。
そして、心のバリアフリーをめざすために、身近にいる者のふれあいを大切にしようと訴えています。

○3席　旭市立三川小学校
加瀬　七海 さん
【人それぞれのふつう】
障害者の施設で働くお姉さんと挨拶を交わしたり、道徳の授業で学んだりしたことを通して、「障害者と積極的に関わりをもてば、障害者に対する偏見はなくなる」と訴えています。

中学1年生選評

○1席　銚子市立第一中学校
青木　優芽 さん

【夢へと繋げる】

在宅看護がいかに大変か、弟の吸引のお世話を通して、家族皆の協力の様子や心情が実にしっかりと描かれています。

入学式や運動会の感動的な場面も胸をうちます。どうか立派な看護師をめざして頑張ってください。

○2席　旭市立飯岡中学校
加瀬　幸誠 さん

【病気と闘う人】

著者が通院している千葉県こども病院には、難病をかかえ必死に闘っているこどもたちが大勢います。

そして、病気に打ち勝つために、どんなつらい治療でも受け止めて耐え、治ることを誰もが信じて頑張っています。

みんなにもそのことを知ってほしいし、「自分も小さい子たちを勇気づけてあげたい。」と力強く訴えています。

○2席　旭市立第二中学校
栄野元　陽菜 さん

【九十四歳の曾祖母】

元気だった九十四歳の曾祖母が、突然寝たきりになってしまいましたが、ヘルパーさんや家族の支えがあって元気になり良かったですね。

介護の様子や心情が具体的に描かれ、その大変さがよくわかるとともに、やさしい思いやりが感じられます。

○3席　旭市立飯岡中学校
石井　愛里佳 さん

【色々な考え】

黒柳徹子さんのユニセフ報道で、飢えに苦しむ子どもたちのことや、フィリピンで広めている指一本のピースサインを知りました。

世界には色々の考えをした人や国があるが、その人や国を認め、協力して戦争のない幸せな国作りができると良いなと訴えていて、考えさせられます。

○3席　銚子市立第五中学校
宮内　汐菜 さん

【バリアフリーについて】

先天性四肢障害で間接が曲がらず、胃ろうも行っているお姉さんは、がんばり屋でパソコンもiPadもDSも一人でやれる。でも、出かけると不便なことが多いし、差別と偏見の視線にさらされるという。

心のバリアフリーがなくなり、誰もが暮らしやすい社会になってほしいと強く訴えています。

○3席　銚子市立第五中学校
嶋田　一輝 さん

【家庭内での介護体験について感じたこと】

老化が進んできた八十九歳のひいおばあちゃんの介護を通して、年をとるということはどういうことか、が分かってきました。

これからの高齢化社会を支える若者の一人として、優しい心でお年寄りを敬う気持ちを忘れずに接していきたいという心構えが、頼もしく感じられます。

中学2年生選評

○1席　旭市立第二中学校
多田　遼平 さん

【僕の兄】

少しハンデのある兄の日常を温かい目で見つめています。それを通して、いつも笑顔で生活する大切さ、何事にも挑戦するチャレンジ精神のすばらしさを学んでいます。

福祉社会実現の根幹は家庭にあることを再確認させてくれます。

○2席　銚子市立第六中学校
一原　彩花 さん

【笑顔でいること】

二人の曾祖母を通して、笑顔で生きることのすばらしさを体得しています。人生は楽しく生きているからこそ、苦難を乗り越えることができるのだと……。

そして、そのうちの一人の曾祖母の死から、今までより明るく、常に笑顔を絶やさない私に変わっています。

○2席　旭市立第二中学校
鈴木　蘭来 さん

【忘れられない笑顔】

老人介護施設を見学した一日を詳しく述べています。他の人に聞いたり自分で想像するより、実際に自分の目で見ることの大切さを指摘しています。

入所している方の元気のもとは、

職員の方々が笑顔で接しているからだと気づきました。

○3席　銚子市立第六中学校
山口　沙織　さん

【ありがとうの魔法】

元気な曾祖母が転んで骨折し、入院して手術を受けました。初めは曾祖母の介護の手助けができるのを嬉しく思っていましたが、だんだん大変になってきました。現実の介護は本人も家族もつらいものでした。

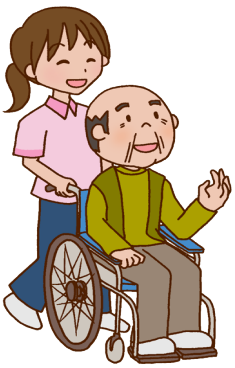
しかし、曾祖母から「ありがとう。」と言われた時、手助けができて本当によかったと思っています。

○3席　旭市立第二中学校
名雪美海　さん

【福祉について】

身近なお年寄りの方をよく見て、福祉について考えています。近所のスーパーで買い物をしている老人、自分の曾祖母や祖父母、老人施設に入所している方々等。

このように、具体的な事実から福祉を考えることが大切です。そして、できることから手助けしようと思っています。



中学3年生選評

○1席　旭市立第二中学校
飯島　茜　さん

【車イスと松葉杖の修学旅行】

バレー部の練習で骨折し、思ってもみなかった車椅子と松葉杖での修学旅行になりました。不自由な私を皆が助けてくれました。

実際に経験すると、車椅子や松葉杖の生活は大変でした。人の優しさと健康のありがたさがわかります。そして、今より生活しやすい環境の整備を望んでいます。

○2席　銚子市立第二中学校
植田　雅　さん

【やりがいのある介護】

お母さんが働いている介護施設に実際に行った体験が、生き生きと述べられています。

お母さんの仕事ぶりや入所しているお年寄りの姿を通して、介護についての理解が深まっています。

○2席　旭市立第二中学校
黒川　芽育　さん

【家族の死】

大好きだった祖父との交流の日々が生き生きと描かれています。その祖父の突然の死を通して、食べ物がよく噛むことができない高齢者の食事のあり方や生活する上での安全な住居のあり方について考えています。

○3席　旭市立第一中学校
石井　陽子　さん

【親切にすること】

「思いやり」や「親切にする」ことを具体的には理解していなかった私は、あることでわかるようになりました。それは、電車の中で一緒に座っていた父が妊婦さんに席をゆずったことでした。

妊婦さんに気づかなかった自分を情けなく思った私は、身近なことから親切にすることを実践しています。

○3席　銚子市立第六中学校
藪　亜由美　さん

【少子高齢化が進んでいる今】

祖父の介護を手伝う様子が生き生きと描かれています。祖父と笑顔で会話をしている時が、とても楽しいことになりました。また、介護の手伝いでやりがいを感じています。

このことを通して若い人にも「介護」について、もっと知ってほしいと訴えています。

○3席　銚子市立第五中学校
若梅　志帆　さん

【助ける】

病気の祖父に対して自分ができることは何なのかと、一生懸命に考えています。特に、転んで骨にひびが入ってしまったことをきっかけに、骨を強くする料理を考えようとしています。

また、祖父だけでなく、多くの高齢者の力になりたいと思っています。

○3席　銚子市立第二中学校
伊東　希佳　さん

【三度目の奇跡】

曾祖母が病気で入院し、弱気になってしまいました。薬を拒否し、食事もほとんどしません。

それを救ったのは家族でした。毎晩、交代で付き添いました。家族が一丸となり、改めて家族の絆の強さを感じています。

◇優秀作品紹介◇

わたしのおじいちゃん

銚子市立双葉小学校
五年　宮内　詩乃

3月11日わたしはいつも通り学校で勉強していました。下校の時間、友達のお母さんがむかえにきて不思議に思いました。車の中でおじいちゃんがたおれたと言われ、昨日まで元気だったのになんでと、信じられない気持ちでいっぱいでした。

お母さんと病院に着くと、手じゅつが始まっていて、わたしは手じゅつが成功するのだろうか、死んでしまったらどうしようかと、心配で心配で仕方がありませんでした。

手じゅつは成功しましたが、頭の血管がはれつしてしまった病気だったので、意識がもうろうとしていて、しゃべれなくなっていて、ほとんど笑えなくなっていて、とてもショックでした。

先生の話を聞きましたが、完全に治る病気ではなく家族の介ごが必要だと知りました。それからわたしは時間があるときにできるだけお見まいに行きました。

おじいちゃんが最初に入院していた病院は大きくて、きれいで、行く度にそうじしている人を、見かけました。売店はコンビニのように、いろいろな物が売っていて、カフェもあって病院とは思えませんでした。

おじいちゃんは、おむつが必要でした。おむつは一つ一つは軽いのですが、たくさんまとまって入っていると重たくて、運ぶのが大変でした。

おじいちゃんが入院していた病とうは、デイルームというところで、患者さんがリハビリをしていました。一人の患者さんに一人のリハビリりょう法士という仕事の人がついていて、数をかぞえながら、手や足をのばしたり、立ったりしていました。わたしのおじいちゃんのリハビリは、病室でしたが、指を広げたり、ベットのわきで、自力ですわる練習をしていました。初めて見たときは、とても痛そうな顔をしていて、手がぶるぶるとふるえていて、骨が折れてしまわないのだろうかと、とても心配でした。

リハビリをしないと、体の関節がかたまってしまうそうです。自分達は、かんたんに関節が動くのに、病気になると、手を広げることすらできなくなってしまうんだと知りました。わたしは、おじいちゃんの関節がかたまらないように、うでを持ち上げたり、指を広げてあげました。

二ヶ月間入院しましたが、退院するころには、うでを自力で持ち上げられるようになり、手も少しですが広げられるようになっていました。声をかけると、時々ですが、返事をしてくれたり、笑ってくれたりしてくれました。

今は家から近い病院に移って入院しています。話すこともできないし、会いにいってもほとんどねています。関節もかたまってきていて、手を広げてあげると、すごく痛そうな顔をします。ときどき熱もでたりしていて、あまりよいじょうたいとは言えません。

わたしはおじいちゃんの介ごを体験して、家におじいちゃんが帰ってくれば、毎日会えると思いますが、病院でやっているように、上手にお世話はできないので、家で介ごするのはむずかしいと、わたしは思います。

最初に入院していた病院のようにきれいでリハビリを毎日しっかりやってくれるような病院がわたしが住んでいるところにもたくさんあれば、おじいちゃんのような患者さんも家族もとても助かるのになと思いました。

ありがとう高尾さん

旭市立琴田小学校
六年　江ヶ崎　友里

私は、福祉というのは、一体どういうことを言うのだろうと思い、国語辞典で調べてみました。そうしたら福祉というのは「多くの人の幸福」と書いてありました。福祉というのは、こんなにも広い意味があったんだと、とても驚きました。

そして私はその中にある「介護」について調べてみました。

介護サービスは、自宅に来てもらい、日常生活の手助けをしたり、施設に通ったりするサービスです。

自宅まで行って日常生活の手助けをするなんて、とても大変なのではないかと思います。他にもいろいろなお世話をしているのを知り、私は驚きました。介護をしている人は大丈夫なのかと心配になりました。

そして、私は自分の家のおばあちゃんも介護を受けているのではないかと思い、おばあちゃんに聞いてみました。そうしたら、おばあちゃんもお世話になっていることを知りました。

私のおばあちゃんは、私や兄が小さい時は健康で私たちの面倒をよく見てくれました。

しかし、年をとってきて足が弱くなってしまい、車いすに乗る生活になってしまいました。

よく考えれば、母やおばあちゃんが知らない人と話をしているのを見たことがありました。その時に介護の相談をしていたそうです。

毎日生活するためには、どんなものが必要か、どうすれば介護を受ける人が快適に過ごせるか等、母が心配だった事をいろいろと聞いていたのだそうです。

先ほどの「知らない人」は、「ケアマネージャー」と呼ばれる介護のプロの人です。その人のアドバイスで家の中が少しずつ変わっていきました。

新しい「手すり」がトイレや廊下についたり、すごそうなベッドが置いてあったりするのです。

それは、足腰が悪いおばあちゃんが使うものです。手すりがなかったらよく歩けないおばあちゃんが困るだろうし、ベッドが上下に動くので腰も痛くならなさそうです。私は、そういった介護を受ける人の生活が快適になるようにいろいろとアドバイスをくれていることに気がつきました。

ある時、私は、おばあちゃんに、「おばあちゃんにとって、ケアマネージャーさんはどんな人なの。」と聞いたら、

「介護を受ける人と介護をしてくれる人との架け橋になってくれている人だよ。」

と説明してくれました。

介護を受ける側の人にとって、ケアマネージャーさんは、とても大切な人なんだとわかりました。私もなるべくおばあちゃんの身の回りの事をやってあげられたらいいなと思うようになりました。

そして、ケアマネージャーさんが家に来た時に、どういう事をしているのかを観察することにしました。

その方は、私が想像していた通りの人でした。おばあちゃんが信頼を寄せているわけがわかりました。仕事熱心で、おばあちゃんの身になって一生懸命仕事をしてくれていたのです。

その後、私はおばあちゃんと一緒にお風呂に入ったり、けがをしている所に包帯を巻いてあげたりしました。それは、ケアマネージャーさんがしていたことを思い出したからです。これからも、おばあちゃんの手伝いを頑張ってやってみようと思います。

人のために働く「福祉」の仕事はいっぱいあるけれど、私は介護が一番大変だと思います。なぜなら、いろいろと出来ないことがある人もいるので、そのような人達が生活できるように助けてあげる仕事だからです。

私も、おばあちゃんとお風呂に入ったことがあり、手が上がらな

いおばあちゃんの頭を洗ったり、背中を流したりした時はとても手が疲れて大変だったのです。そんな少しの事で大変だったのに、介護をする人達は、毎日そのような仕事をしてくれているのです。とても大変なお仕事だと思います。

また、ベッドやいろいろな家具を紹介したり、お金の事とかも親身になって相談にのってくれたりするのは大変だろうと思いました。

でも、そういう方達のおかげで、母も助かっているのでとても感謝しているようです。

私、そうやって人のためにいろいろと行動できるのは素晴らしいと思いました。これからも、私にできることがあったら積極的に手伝っていこうと思いました。そして、ケアマネージャーさんみたいには仕事ができないけれど、おばあちゃんと話をする機会を増やして、家族だからできる事を探しながら共にすごしていきたいと思います。

夢へと繋げる

銚子市立第一中学校
一年　青木　優芽

私の弟はとても小さく生まれたためすぐに新生児集中治療室（ＮＩＣＵ）に入院しました。点滴や酸素を送る管などにつながれてとても痛々しい姿でした。

ある時、呼吸が出来なくなり生死をさまよった事があります。検査の結果、気管切開をする事になりました。気管切開をすると声が出せなくなり、たんの吸引をしなくてはなりません。弟が退院するためには、在宅での吸引が必要となります。家族全員、看護師さんの指導の元、吸引の仕方を学びました。学びながらすごく怖そうだと思いました。なぜなら、のどに細い管が入っていくのを見たからです。でも、これをしないと生きられないので、すごく痛々しいし、怖いけれど吸引の仕方を覚えました。

在宅看護の始まりです。普段から吸引回数の多い弟でしたが特に、季節の変わり目、台風シーズンはいつも以上に吸引回数は多くなりました。多くなるにつれて、私が吸引の手伝いをする事が増えていきました。最初は看護師さんの様で憧れもあり進んで行なっていたけれど、それも次第に飽きてきてとても面倒になっていきました。親に頼まれても、「面倒で嫌だなぁ」と思う事が増えました。弟を連れて、どこかに遊びに行くにも、吸引する場所や、環境が整っておらず思う様に外出も出来ませんでした。その事を弟のせいだと言う私と、両親とで言い争いになった事もあります。今思えば、弟は好きで病気になった訳でもないのになんであんな事を言ってしまったのかと、申し訳なく思っています。

この様な生活がしばらく続き、風邪を引いては入院という事が何度もありました。そして、弟の病状が良くなり六年間続いた吸引もしなくてすむようになり、普通の人と同じ生活が送れる日が来ました。私は、ごく普通の生活がこんなにもすごい事だとは思いませんでした。初めて弟の声が聞けて、一緒に遊びに行けて、普通って言うのはとても幸せなんだなとつくづく思いました。それから弟は風邪を引く事も無く、笑顔で毎日を過ごしています。

今まで通っていたロザリオ児童デイサービスを卒園して今年から千葉県立銚子特別支援学校に入学しました。吸引も無くどこも悪くなくても、小さく生まれてしまったため、普通小学校にある物、例えば洗面所などに手が届かないことなどがあるからです。私は、弟の入学式に行けなったので、ビデオで見ました。「手のひらを太陽に」を皆で歌っているのを聞いた時、とても感動的でした。色々な困難なことを家族全員で頑張っているんだろうなと思うと、胸が熱くなりました。五月に運動会を見に行った時に、全校生徒で行っている玉入れを見ました。この玉入

れを見ていると、先生と生徒の一生懸命さが強く伝わってきました。なぜなら車いす乗った生徒と先生が一緒になり、先生がその生徒の手にボールを握らせてあげて玉入れのカゴに入るのです。最後まで決して諦めずに、競技をし続けている子をすごく応援したくなりました。一つの競技で勝ったチームの喜びの声はとても大きかったです。心から応援しようと思った感動的な運動会は初めてでした。

この様な体験をしてみて、将来はＮＩＣＵで働く看護師になりたいと思うようになっていきました。弟が気管切開の手術をする時に看護師さんが書いてくれた日記です。そこには、弟への応援メッセージがびっしり書いてありました。それを見て私は、医師の方もそうだけれど、看護師さんもすごく応援してくれたので、どこか不安だった気持ちが「しっかり応援しよう」という気持ちに変わりました。こんなに一生懸命看護師さん達が不安を無くしてくれて、支えてくれたので、私もそんな看護師になり、不安を抱えている家族と、一生懸命生きようとしている小さな命を救いたいです。そして、弟を助けてくれたＮＩＣＵの人達に恩返しがしたいと思っています。

これが、私の福祉から学んだ貴重な体験です。

僕の兄

旭市立第二中学校
二年　多田　遼平

僕には二人の兄がいます。上の兄は高校三年、下の兄は高校一年、下の兄は軽度の知的障害があります。

夏休みになると毎年、下の兄のことを作文に書いています。普段の生活の中で兄のことをじっくりと考えることはあまりないのですが、夏休み、この作文を書くときには、兄や家族のこと、自分のことを振り返って考える良い機会となっています。

兄はこの春、高校に進学しました。普通高校に進学して、中学でもやっていた陸上を続けることを強く希望していた兄は、その願いが叶い、充実した高校生活を送っているようです。知的障害があり、テストで高い点数を取ることができないので、五教科の試験がある公立高校への進学は無理でした。私立高校で陸上部があり、さらに兄のような生徒の受け入れ体制が良いという東金にある学校を志望校に決めました。専願なので、作文と面接という試験でした。学校で面接練習を何度もしてもらい、家でも母と繰り返し練習をしていました。問題は作文です。文章を書くことは、兄にとってはとても大変な作業で、気分がのらない時にはまったく書けないこともあります。校長先生、進路指導、支援学級の先生方が、兄たち受験生のために高校にお願いに行ってくれました。兄も僕たち家族もとてもありがたく、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして兄は、みんなの力を借りて、無事に合格することができたのです。

高校へは、兄の強い希望で自転車で通うことになりました。成東駅から三十分かかります。両親と兄で、危なくない通学路を決めるため、実際に自転車で走って確認をしました。兄のような人達にとっては、確認するという行為はとても大切なことです。安心できれば、普通の人と変わらずに行動することができるのです。

入学式を終え、高校生活が始まりました。兄は、念願の陸上部に入部したのですが、部員は一年五人、二、三年生四人ということで、旭二中の陸上部とは大違いでした。先輩方は優しく親切で、兄はすぐに溶け込めたようでした。学校から戻ると夢中で今日の報告をする兄を見ていると、なんだか僕はうらやましく思ってしまいます。クラスでも友達ができ、お弁当を一緒に食べたりすることもあるそうです。トラブルがあっても、アドバイスをしてくれる友達

がいて、なんとか自分で解決しているようです。そして僕が一番すごいと思っていることは、毎日電車で三十分、自転車で三十分、往復で二時間の道のりを自力で通学していることです。雨が降れば、合羽を着て自転車に乗ります。担任の先生が、雨の中、合羽を着て自転車で登校してくるのは生徒の中でも兄だけではないかと感心して言っていたそうです。雨の日の自転車は大変です。しかも往復二時間もかかるのに、兄は一度も文句を言ったことはないのです。僕だったらできないかもしれません。

夏休みには、富士登山も経験しました。入学前から兄が楽しみにしており、参加者を募集して行われた登山ですが、無事に山頂に到達し、素晴らしい御来光を拝むことができました。家族中で心配していた富士登山でしたが、無事にやり遂げて、兄はまた一つ大きくなったように感じました。また、最近は野球にも興味があるようで、となりのグランドで練習をしている野球部のみなさんと仲良くさせてもらっているようです。小学生の頃には、三兄弟で少年野球に入っていました。三人とも中学では陸上部に入ってしまったので、野球からすっかり遠ざかってしまっていました。先日は夏の甲子園の地区予選を全試合応援に行き、とても興奮した様子で、来年は応援委員会に入って応援することに決めた、三年生になったら団長にもなりたいと言っていました。僕は、笑顔で話す、兄のチャレンジ精神に圧倒されてしまいました。

毎日笑顔で生活する。それは、人として大切なことだと思います。兄のように、少しハンデがあっても、本人の努力と周りのあたたかい心があれば、いろいろなことに挑戦したり、自分らしく生きていくことができるのだと、兄を見ていて思いました。

今日、日本では兄のような人達が増えているといいます。ぼくは、将来どのような職業に就くか、まだ決めていませんが、困っている人や弱い立場におかれている人達の力になれるような職業に就きたいと思います。ぼくたち若い世代が力を合わせ、みんなが安心して暮らしていけるような社会を作っていきたいと考えています。

車イスと松葉杖の修学旅行

旭市立第二中学校
三年　飯島　茜

五月七日私は放課後のバレー部の練習でジャンプし着地時に左足を捻ってしまいました。あまりの痛さにすぐに立ち上がれることはできませんでした。友達がイス、氷、タオルを用意してくれて先生を呼んできてくれました。応急処置をしてもらい、すぐに病院にいくと「骨折」と診断されました。ギプスを巻かれ取れるまでに最短でも三週間はかかると言われました。開いた瞬間真先に「どうしよう」と思いました。もう五月でこの夏には部活引退。最後の大会までに間に合わないかもしれないと思いました。そう考えると今まで頑張ってきたのにとショックでした。それに何より中学校生活で一番楽しみにしていた修学旅行を二週間後に控えていたので更に心を打ち砕かれました。

翌朝からは、母の送迎で松葉杖の生活が始まりました。両手が使えない私のために毎朝、学校に着くと友達がスクールバックを教室まで持っていってくれました。移動教室の時もクラスの友達がゆっくりな私のペースに合わせて一緒に歩いてくれて荷物も持ってくれました。委員会や係活動も全て友達が私の分までやってくれました。私は、友達はとても大切だな

と実感しました。

修学旅行では、担任の石毛先生が旅行前の諸準備で忙しい中、私の限られた行動範囲の中で楽しく旅行ができるようにと見学先の危険性や班別行動でのタクシーの手配等、色々と考えて下さいました。「松葉杖だけでは大変だろう」ということで車イスを貸してくれるところも調べてくれました。

こうして楽しみにしていた修学旅行は松葉杖と車イスを持って行くことになったのです。車イスは、小学校の時に授業で体験した以来です。まさか、自分が実際に使うことになるとは思ってもみませんでした。初めは、友達の前で乗ることが恥ずかしかったし、うまく使用することができるか心配でした。慣れない松葉杖を使うことも大変でした。ホテルの玄関先

で絨毯に松葉杖が引っかかり、そのまま転んでしまいました。見学先では長い階段があり、健康であれば二段とばしでもかけ上がれる階段が松葉杖では一段一段をゆっくりとしっかり一歩ずつ踏みしめてバランスを崩さないように昇りました。時には、片足でジャンプして上がったり今まで使ったことのない筋肉まで使ったりしたので全身筋肉痛でした。だから、バリアフリーになっているところはとてもうれしかったです。逆にバリアフリーになっていないとため息をつくばかりでした。みんなと一緒に見学したかった場所は車イスを使えるところと使えないところがあり、まだまだバリアフリーになっているところは多くはありませんでした。そのために、危険ということになりあきらめなければなりませんでした。じゃり道や段差のある場所では一人で車イスを動かすこともできませんでした。班別行動でも行ける場所は限られていましたが、同じ班の友達や担任の先生、タクシードライバーさんが車イスを押してくれました。

今までは、バリアフリーはあってもそんなに使っていないのではないか、どんな人が使っているのかとよくわかっていませんでしたが、今回身にしみて大切さがわかりました。

健康な時には、他人事で感じなかったけど、自分が車イス、松葉杖の生活をして、不自由な方は毎日生活するだけで体力も使い、大変だなと思いました。私の場合はケガなので時間の経過と共にいつかは治ります。でも、ずっと車イス、松葉杖を使わなければならない方や高齢者の方は小さな事でも細かい配慮が必要だと思いました。

ケガをした私の姿を見ると、友達は「大丈夫？何かあったらいつでも言ってね」や荷物を持とうとすると「いいよ！危ないし持つから大丈夫だよ」「ゆっくりでいいからね」などいつも声をかけてくれました。その度に私はみんなに助けてもらって心の底からうれしかったです。半面、申し訳なくて複雑な気持ちでした。

二ヶ月不自由な生活をして、ケガをした自分を悔やんだ時もありましたがたくさん得たものもありました。友達や学校の先生方、家族の支えや協力のおかげで無事修学旅行も参加でき学校生活も送ることができました。人間は一人では生きていけない、誰かの手助けが必ず必要なこと。人の優しさと健康が第一で普通に生活できる喜び。それらを経験し初めてその人の身になって考えることができました。これからの日本の社会で体の不自由な方や高齢者の人が人の目を気にしたり遠慮したりせずに済む、住みやすい環境がどんどん増えていくことを望みます。そして、健常者と変わらずに生活できる社会になったら、とてもうれしいことだと思います。

第23回福祉作文コンクール入賞者

小学4年生の部

2席　旭市立中央小学校　横谷美佑
2席　旭市立鶴巻小学校　石毛晴喜
3席　旭市立萬歳小学校　野口真由子

小学5年生の部

1席　銚子市立双葉小学校　宮内詩乃
2席　旭市立中央小学校　秋元絵美理
2席　旭市立三川小学校　渡辺大介
3席　旭市立共和小学校　本多裕希
3席　旭市立富浦小学校　加瀬瑞姫
3席　旭市立干潟小学校　上間康生
3席　旭市立矢指小学校　成井希帆

小学6年生の部

1席　旭市立琴田小学校　江ヶ﨑友里
2席　旭市立豊畑小学校　小林悠
2席　旭市立鶴巻小学校　加瀬みのり
3席　旭市立中央小学校　石毛優愛
3席　旭市立共和小学校　伊藤実咲
3席　旭市立三川小学校　加瀬七海

中学1年生の部

1席　銚子市立第一中学校　青木優芽
2席　旭市立飯岡中学校　加瀬幸誠
2席　旭市立第二中学校　栄野元陽菜
3席　旭市立飯岡中学校　石井愛里佳
3席　銚子市立第五中学校　宮内汐菜
3席　銚子市立第五中学校　嶋田一輝

中学2年生の部

1席　旭市立第二中学校　多田遼平
2席　銚子市立第六中学校　一原彩花
2席　旭市立第二中学校　鈴木蘭来
3席　銚子市立第六中学校　山口沙織
3席　旭市立第二中学校　名雪美海

中学3年生の部

1席　旭市立第二中学校　飯島茜
2席　銚子市立第二中学校　植田雅
2席　旭市立第二中学校　黒川芽育
3席　旭市立第一中学校　石井陽子
3席　銚子市立第六中学校　藪亜由美
3席　銚子市立第五中学校　若梅志帆
3席　銚子市立第二中学校　伊東希佳

医療保護施設
海上寮療養所
就労継続支援B型事業所
ワークセンター
医療型障害児入所施設・療養介護事業所
聖母療育園
生活介護・児童発達支援・放課後等デイサービス(重心)
聖母通園センター
児童発達支援・放課後等デイサービス事業所
ふたば保育園
児童発達支援事業
旭市こども発達センター
療育相談事業
ロザリオ発達支援センター
障害者支援施設
聖マリア園
障害者支援施設
聖家族園
障がい者の就労促進事業所
みんなの家
生活介護事業所
聖家族作業所
共同生活援助事業所
ナザレの家あさひ
高齢者支援事業
ロザリオ高齢者支援センター
ロザリオ訪問介護事業所
通所介護・介護予防通所事業所
デイサービスセンター・ローザ
障害者支援施設
佐原聖家族園
生活介護・放課後等デイサービス
聖ヨセフつどいの家
共同生活援助事業所
ナザレの家かとり
地域生活支援センター
友の家
中核地域生活支援センター
海匝ネットワーク
障害者就業・生活支援センター
東総就業センター
香取市相談支援事業
香取障害者支援センター
障害者就業・生活支援センター
香取就業センター

このロゴマークは、師イエズス修道女会 北爪悦子修道女 により作成されました。